

『ねじの回転』にみる人間関係

On Human Communication through *The Turn of the Screw*

岡田 慶子

(Keiko OKADA)

I. 序論

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、大西洋両岸で活躍したアメリカの小説家ヘンリー・ジェイムズ（1843～1916）の生み出した中編小説 *The Turn of the Screw*（1898）は、様々な解釈を生む傑作である。その難解な筆致で、「小説家の中の小説家」と目されるジェイムズであるが、この作品も単なる「幽霊物語」の範疇には収まりきれない不可解さに満ちた作品である。田舎牧師の20歳の末娘が初めて家庭教師の職に就いた体験が、本人による手記という形式で語られている。土地勘のない田舎の立派なお屋敷の中で、幼くして両親に先立たれた、正に天使のような二人の子供たちの面倒を、若い彼女が総監督者として見るべく赴任することになった。ロンドンに住む子供たちの後見人である伯父は、一切を彼女の手に乗せてしまい、自身は一切関与しない姿勢を貫く方針で、連絡さえも拒否するという奇妙な条件下での初仕事である。しかも、前任の家庭教師死去の事実だけが知らされ、その事情については一切語られない。後任者選定に苦勞している依頼人にほのかな恋心を抱き同情した娘は、かなり不可解なこの仕事を躊躇しながらも結局受諾してしまい、まるで「大きな漂流する客船の中に」身を投じ、しかもその中で「舵を握らされている」、という心許なさを当初から抱かされることになる。そんな閉鎖的な不安の中で、男女の幽霊を目撃した彼女は、その二人の幽霊を、大事な子供たちを邪悪な世界へと引きずり込む忌むべき元凶とみなし、幼い兄妹を守るべく奮闘するのだが、結局、幽霊を目撃したのは彼女一人であった。果たして幽霊は本当に存在したのか、それとも、全ては極限状態にあった彼女のフロイト的な性の抑圧による妄想に過ぎないのか、といった、批評家たちの侃々諤々の諸説には事欠かない。—— the critic is thwarted whenever he or she tries to grasp the real and tries to wrest from the unmasterable tone of *The Turn of the Screw* a determination or univocal meaning. At every “turn” James invites his readers to make a construction and to attempt a solution...there is simply no way to avoid repeating the text’s fundamental division between the uncanny ghostliness of the governess’s visions and the hysterical mechanisms that inform them. ⁽¹⁾

当時のヨーロッパ人にとっては、幽霊の存在というのはかなり信憑性のある身近な関心事であり、研究機関も設立され、多くの証言が集められ検証されている。—— Indeed, in the last quarter of the nineteenth century, spirits of the dead were taken seriously as subjects for both scientific discussion and literary portrayal. Modern spiritualism can be said to have begun in

1848.⁽²⁾——現代の私たちはその意識の格差を考慮しなければならないが、作家はこの作品の中においては、幽霊の存在を明確には示していない。かといって、家庭教師個人の妄想であると断言もせず、非常に曖昧な扱い方をしているのである。執筆当時の「ジェームズの眼は、生きた人間の具体的な心理の動きにあった。そしていかに生きた人間を作品の中に定着させるかにあった。それ故、人間性の複雑さ、人間存在の場の複雑さ、を表現しようとはしたとしても、古典的な単純化、寓意への抽象、といった試みは一度も行なったことがない。抽象的善悪を主題にすることぐらい、当時のジェームズの意図から離れたものはなかったろう」⁽³⁾

このように、ジェームズという作家は19世紀の末から20世紀初めにあって、いち早く人間の心の動きに着目した。私たちの目前には確固とした現実がありのままに存在するのではなく、個々人の視界の中に、個々人の精神に左右される目が捉えた枠組みの中での有り様が、非常に不確かな状態で、人数分存在しているのが現実なのである。一切が限られた視界の中での出来事であるということを了解していないと、自分が見ている現実を他者も同じものを見ており、同じように感じているはずだと思ひ込む。その結果、他者との間に意識の齟齬が生じてしまう。コミュニケーション不毛が声高なテーマとなる現代という時代に、ジェームズの残した作品を味わうということは、私たちにとって大きな示唆となるのではないだろうか。一個人の視界の中で、個人の「眼」がどのように目前の状況を見ていくのか、主観的視点に固執するあまり、他者との相互関係が硬化していく過程を考察し、現代における日常のコミュニケーションへの手がかりを探りたい。

II. 家庭教師の現実

ある6月の午後、赴任先の屋敷に馬車でゆったりと向かう彼女の目には、想像していたよりも立派なお屋敷が目に入り、期待と興奮で全てのものが明るく見えている。近づく屋敷の開いた窓からは二人のメイドが彼女の乗った馬車を見ている。期待と不安に胸を膨らませている彼女は、未知の世界を目前に見ているが、その未知の屋敷の中からも、未知の存在である新任の家庭教師である自分に対する視線がある。双方がお互いに未知のものを見ていて、当然ながら、手記の書き手による「私」という片側だけの印象が描かれている。馬車から見る「私」の視線と印象。そこに飛び込んでくる、二人のメイドの視線。その二人のメイドの視界にも、「私」の馬車が近づいてきて、それに対する印象が刻まれているはずだ。

そして、「私」は、自分用に宛がわれた部屋の中で、初めて自分の全身を鏡で見て衝撃を受ける。—— the long glasses in which, for the first time, I could see myself from head to foot, all struck me—like the wonderful appeal of my small charge—as so many things thrown in.⁽⁴⁾——今まで自分の全身を鏡に映した経験がない彼女が、この先、等身大の自分自身と向き合わされることになるという象徴的な言及である。主人公は最初から、都会に住む子供たちの伯父に恋心を持ち、それが実現することを漠然と夢想している。だが、現実はいくまでも彼女に厳しく冷やかである。そのことを認めたくない思いが子供たちへの執着に繋がる。子供たち

を制御することで、伯父の関心を引くことができると期待している。子供たちは彼女の思惑を感じ取り、徐々に拒否反応を示していくようになる。言いようのない不安を抱く中で、彼女は不審な男を塔の上に目撃する。屋敷の中で唯一信頼を寄せているはずのMrs. Groseに打ち明けることはせず、自分ひとりの胸にしまっておこうとするが、二度目に家の窓越しに覗き込んでいるその男の顔を目撃し衝撃を受けた彼女は、男と同じ動作をすることで男の意図を探ろうとする。自ら外へ回り窓を覗いてみると、その様子を今度はMrs. Groseに目撃され、自分が受けたのと同様の衝撃を彼女に与える。—— an ironic reversal of locations ——⁽⁵⁾ 目撃した男の特徴の説明から、男は既に死亡したはずの使用人のQuintだということになり、二人は共に驚愕する。Quintに会ったこともない彼女が、Quintの特徴を言い当てたのだ。しかもその男はもうこの世にはいないという。幽霊との初めての遭遇である。

Mrs. Groseは、家庭教師に傍若無人なQuintの邪悪さを仄めかし、特に親交のあった男の子Milesに対する悪影響を印象づける。Mrs. Groseの断片的な説明は、かえって不安を募らせる効果を持つ。天使のような子供たちに対する若干の不審が家庭教師側に植えつけられた。それと共に屋敷内の雰囲気にも不穏なものを感じるようになる。彼女は確かめずにはいられない。—— But there was everything, for our apprehension, in the lucky fact that no discomfortable legend, no perturbation of scullions, had ever, within any one's memory, attached to the kind old place. It had neither bad name nor ill fame, —— 恐らく使用人たちに聞いて回ったのであろうが、新来者の彼女に対して都合の悪いことは何も語らず、事情を打ち明けることはない。そして、彼女は不穏なものは一切ないと結論づける。その力説の断固さが、実は彼女の不安の強度を示し、邪推と共に不安が高じ、子供たちへの監視の目の強化へと繋がる。

後にQuintの死亡時の状況をMrs. Groseから説明された箇所、—— practically, in the end and after the inquest and boundless chatter, for everything; but there had been matters in his life, strange passages and perils, secret disorders, vices more than suspected, —— とQuintの事故死に関しては、「果てしないおしゃべり」があったとだけ記し、前述の醜聞の有無をきっぱり否定した語調からすると拍子抜けするほど簡単に言及する。それよりもQuintの邪悪さの方を強調することで、自分に対する隠蔽の事実への衝撃を隠している。これは、彼女の思い込みの強さをも示しており、赴任してからの彼女が感じ取っていた周囲の不穏さをなんとか否定しようとする、必死の攻防のように思われる。Quintと前任の家庭教師との間の色恋沙汰を屋敷の誰もが了解していたが、事情を聞かされていない「私」は、密かに疎外感を味わっている。平穏な田舎での身分違いの恋愛と不慮の事故死は大事件であり、周辺の住人や当の屋敷で話題に上らないはずがない。何の不名誉もなかったことを殊更強調することで、屋敷内の不穏なムードを彼女自身が感じ取っていたことを認めまいとする頑なさが見受けられる。この現実逃避が彼女自身を追い込んでいくのである。

彼女は、Mrs. Groseに対して一番の信頼を置き、彼女との関係が親密なものであると思込んでいるが、実は、子供たちのことを一番に考えているMrs. Groseは、あくまでも子供た

ちのために、屋敷の中で一番の権限を持つことになった「私」との友好性を図っているのである。当時、家庭教師の家庭における位置は、使用人たちとは一線を引かれて、家族の友人としても——“friend and companion of the family”⁽⁶⁾——認識されていたのである。つまり、使用人たちよりずっと強い立場にいたということで、依頼人の乳母でもあったMrs. Groseよりも、強い決定権を有している。そういう立場を利用して、彼女は周りの者たちに高圧的な態度を頻繁にとっている。一番子供たちに身近な立場のMrs. Groseには、その文盲さを指摘することで彼女の無知を確認させ、自分に対する年配女性特有の包容力を期待しながらも優位に立とうとしている。Mrs. Groseの方は、未経験でまだ若輩の彼女を危ぶみ、実は冷ややかに見ているが、「私」はあくまでも唯一の味方として見ている。

幽霊が本当に存在したのか否かが、この作品の主要な不可解さの一つとなっていて、語り手である「私」が全く面識のなかった男女の特徴を言い当てていることが、正に語り手にとっての幽霊の信憑性の証となっているわけだが、Mrs. Groseを含めた使用人たちから、亡くなった二人の容貌について語り手に想像させ得る機会があったことが考えられるだろう。それが単に語り手の記述の中に言及されていないということで、彼女自身も失念しているのかもしれない。単調な田舎の生活の中での醜聞は、常に話題に上りあれこれ詮索されただろうし、当事者二人共が死去という衝撃的な結末であっては、折に触れ、ことある毎に囁かれていた格好の秘め事のはずだ。好奇心旺盛な妙齢の女性である語り手の興味の耳を捕らえる対象になっていたことであろう。手記は彼女によるもので、私たちは彼女以外の視点を知ることはできない。しかし、読者は徐々に彼女の視点に立って物語の進行を眺めるようになり、それが自分自身にも見えている世界だと思い込まされてしまうのだ。彼女の無意識の中に植えつけられた記憶を彼女自身の語りから知ることは困難であるが、彼女が敢えて書かなかったことの存在をも念頭に置くことが重要である。

過大な責任を押し付けられた未経験の若い家庭教師が、不安を感じながらも赴任先に出向き、周りからの抑圧と重責から早急に子供たちを味方につけ、「難破船」状態の中において、常に自分の監督下に置こうと躍起になるあまり、子供たちからはどんどん敬遠され、素朴に子供たちを愛している、母親代わりの女中頭のMrs. Groseからも信頼を失っていき、という現実に対する焦燥にかられて、奇異な行動が目立っていく。心の奥底では、自分が重責に押しつぶされそうになっている現実を把握しているが、そこから何とか逃避しようとするあまり、邪悪な以前の使用人と家庭教師の幽霊にその責任を押し付けようとする。彼女以外には見えない幽霊を悪者にするすることで、責任回避を目論んでいるのである。

Ⅲ. 子供たちの現実

『ねじの回転』が、語り手の手記という形式をとっている以上、語り手以外の登場人物たちの心情がそれぞれの人物によって説明されることはないが、「私」の目に映る光景が描写される中で、その時々相手の反応から、「私」の認識とは違う他者の心情が伺い知れる。そうい

う場面をいくつか選び出し、語り手を取り巻く人々の現実を考察してみたい。

「私」がこの屋敷に出向いた当初、屋敷には妹のFloraだけがいて、その可憐さが「私」を魅了する。彼女のおかげで、不安度の目盛は大分下降したものの、それもたった一晚だけの平安に過ぎず、兄のMilesが寄宿学校から退学処分を受け家に戻されることとなる。二日目に、男の子の学校からの退学通告が未開封のまま同封された依頼主からの素っ気ない手紙が届き、——“This, I recognise, is from the head-master, and the head-master’s an awful bore. Read him, please; deal with him; but mind you don’t report. Not a word. I’m off.”——「私」は、また厳しい現実に向かい合わされ、激しく動揺している。しかし、実際に会ってみると、Milesは非の打ち所のないほどの子供に思え、「私」は一気に魅了されてしまうが、その舞い上がりぶりは激しく、このような感情の起伏は「私」自身が冒頭で認めているように——I remember the whole beginning as a succession of flights and drops, a little see-saw of the right throbs and the wrong.——正にこの人物の精神の不安定さを露呈している。

幼くして親を亡くしたこの兄妹は、大きな屋敷で否応なく使用人との親密な接触があり、特に幽霊として「私」の目前に姿を現すQuintとその恋愛の相手であった前任の家庭教師Jesselからの影響を大きく受けていたと思われる。当時、両家の子女が使用人と親しく交友することは、好ましくはないと考えられていた。——the dangers of allowing their children too much proximity to servants——⁽⁷⁾ 言葉遣いから作法まで、また姑息な策略までもが子供たちの内部に浸透してしまい、人間性の奥深いところでの影響力が心配された。MilesとFloraという10歳の男子と8歳の女子の中にも、その恐しい墮落の影が見られるのではないか、というのが、実は「私」の大きな懸念であった。死亡した二人の起こした恋愛沙汰に巻き込まれざるを得なかった兄妹の、外見は無邪気に見える行動の中に、「私」は邪悪なものを感じ取っている。Milesの放校の原因は、学友に良からぬ言動をしたことにあるということが物語の最後になって漸く判明するが、その文言の内容は明らかにされていないものの、それが扇情的かつ性的言動の類であったことが想像される。Floraが、最終的に「私」を毛嫌いしMrs. Groseと共に「私」の元を去っていく際に、そのいたいけな少女の口から発せられるとは信じがたい言葉を吐いて、やはり、その具体的な内容は記されていないが、Mrs. Groseを驚愕させている。——The language and manners, the awkward and vulgar tricks which children learn in the society of servants, are immediately perceived, and disgust and shock well-bred parents.⁽⁸⁾ その時のFloraの顔は、可憐な乙女の顔ではなく「老婆」の顔をしているとさえ印象付けられて、邪悪な影響力の大きさを物語る老獺さの表れとして、周囲の者の衝撃の大きさを伝えている。

新任の家庭教師は、この途方もない仕事の依頼主である伯父にすっかり一目ぼれをしてしまい、苦境を乗り越え子供たちの教育に成功すれば、ロンドンに住むこの紳士に認められてハッピーエンドの結末もあり得るという、乙女らしい夢を抱いている一方、適切な教育環境の欠如ゆえに墮落しているであろう子供たちを何とか救済しようという健気な使命感も同時に持ち合わせている。本人としては、後者の表向きの意図だけを強く意識しているがゆえに、子供た

ちに対する詮索の目は厳しくなり、未経験者の勢いも相俟って空回りをして、子供たちとうまくコミュニケーションを取ることができない。彼女の行動が子供の信頼を勝ち得て、その結果として伯父からの歓心も買おうという願望に基づいている時には、つい先走りをして周りからの響感を誘発し、自分の利益ばかりを優先しようとする利己主義で悪魔的な人間像が浮かび上がるが、悪魔的な力から子供たちを救おうと使命感に燃えている彼女は、献身的に自分の責務を果たそうとしている健気で天使的な人間像ともなる。—— The souls that have been sold to the devil are the children's; the dead servants are the powers of evil; the governess is the power of good, seeking to save the children by the strength of her love; and the residual innocence of the children is their one remaining hope of redemption. Their innocence is, as it were, their last link with the good, the power of light; and it is to this that the governess repeatedly appeals⁽⁹⁾

世俗的な恋の成就への願望と精神的なキリスト教的課題との両極端の狭間の中で、「私」は苦悩し、動揺し続ける。両方共に実現への道は険しく、後者には生身の人間の子供の未来がかかっている。その重責に「私」の精神は不安定にならざるを得ない。そして、彼女は幽霊を目撃するが、それは彼女の不安な精神状態の現れとも考えられるであろう。最近の脳科学の発達は、人間の脳の不可思議さを解明しつつある。所謂「幻肢」現象も脳の為せる技であることが分かってきた。霊的な存在の認識についても、かなりの確率で脳の機能が関係していて、脳の中のある部分の刺激によって、あたかも目前に不可解なものが存在するように見えてしまう場合があるという。それを「神」との邂逅と思う者もあるわけだ。⁽¹⁰⁾つまり、見えると信じる本人にとっては、その幽霊は現実に存在しているのである。ただ、他人にはそれが見えないという事実があるだけである。

「私」の心の揺らぎは、子供たちとの接点で次のような現れ方をする。Quintのことも学校での経緯も「私」にどうしても告げようとしないうちに、「私」は、Quintの影、影響力の大きさを感ずる圧迫されている。—— He seemed to wonder; he smiled with the same loveliness. But he clearly gained time; he waited, he called for guidance. “Haven't I?” It wasn't for *me* to help him—it was for the thing I had met! —— Milesは、「私」からではなく、Quintからの指導を待っている。そして、少年の早熟さ—— my absolute conviction of his secret precocity —— を感じ取っている私の前から、脱走を図りたいと願っている。「私」の善意の救済の手から離れていってしまい、墮落の一途を辿るという恐怖感から、「私」は追及の声を上げすぎ、Milesに全く拒絶される結果となる。その激情の中で、「私」は我を忘れ少年に掴みかからん勢いだが、本人の認識では、「凄まじい突風と冷気、凍りついた空気、激しい部屋の揺れ」を感じている。少年は金切り声を上げるが、それらを引き起こしているのはQuintであると「私」は思っている。我に返り、暗闇の中で蠟燭が消えていることに気づいて、Quintの存在を確信する「私」とは対照的に、Milesは自分が吹き消したとあつけない種明かしをするのである。ここに、Milesと「私」の認識のずれが如実に現れている。

"Why, the candle's out!" I then cried.

"It was I who blew it, dear!" said Miles.

Floraの場合、その修復不可能な断絶は、湖で訪れる。幽霊と共に姿を消したと思われた Flora は、湖のほとりにいた。Mrs. Grose と共に駆けつけた「私」の目に映ったものは、今度こそ承認が確保できると期待される前任者の幽霊の姿であった。

"What a dreadful turn, to be sure, Miss! Where on earth do you see anything?"

I could only grasp her more quickly yet, for even while she spoke the hideous plain presence stood undimmed and undaunted. It had already lasted a minute, and it lasted while I continued, seizing my colleague, quite thrusting her at it and presenting her to it, to insist with my pointing hand. "You don't see her exactly as we see?--you mean to say you don't now--now? She's as big as a blazing fire! Only look, dearest woman, look--!" She looked, just as I did, and gave me, with her deep groan of negation, repulsion, compassion--the mixture with her pity of her relief at her exemption--a sense, touching to me even then, that she would have backed me up if she had been able.

なぜ見えないのか、自分にこんなにはっきり見えているものが、彼女の目に鮮明に捕らえられている女の姿が Mrs. Grose には見えないということが「私」にはどうしても理解できない。見えていないことが全く信じられないという確信に満ちた「私」の熱のこもった言いように、Mrs. Grose はただ驚愕している。「私たち」には確かに見えていると、彼女は言い張る。――「網膜上の像が一定しているかぎり、知覚がいつも一定に保たれるはずだ。しかし実際はそうではない。網膜の像が同じであっても、知覚ががらりと変わることがある。……網膜上の像は一定で、まったく変化していないのに、脳がそれをどう解釈するかによって、上をむいているようにも、下をむいているようにも見えるのだ。したがって知覚という活動には、たとえそれが立方体の構造図を見るという単純なものであっても、脳による判断が含まれている。」⁽¹¹⁾―― Flora にも見えていないかもしれないが、「私」は彼女が見えているはずであると決めつけている。Flora があくまでも白を切っていると思ひ込み、ここぞとばかりに白状させるぞという構えで臨んでいる。その頑強な強要に少女は怯え、Mrs. Grose はたじろいでいる。「私」の有無を言わさない強烈な思い込みに対して二人はなす術もない。「私」にとっては、自分の視界が全てであり、自分の視点で捉えたものこそが真実であるという思いがあり、傍らの二人が目前に見ている風景が自分のそれと寸分違わないと信じている。二人には全く別の光景が広がっているかもしれないという発想は皆無である。両者の断絶は幽霊の存在を巡って決定的なものとなり、この後、Flora は「私」と決別をし、Mrs. Grose に連れられて伯父の元へと去っていくのである。

IV. ミセス・グロースの現実

“Another person -- this time; but a figure of quite as unmistakable horror and evil: a woman in black, pale and dreadful -- with such an air also, and such a face! -- on the other side of the lake. I was there with the child -- quite for the hour; and in the midst of it she came.”

“Came how -- from where?”

“From where they come from! She just appeared and stood there--but not so near.”

“And without coming nearer?”

“Oh for the effect and the feeling she might have been as close as you!”

My friend, with an odd impulse, fell back a step. “Was she some one you’ve never seen?”

男の幽霊を目撃した後に、今度は女の幽霊を「私」は目撃する。その衝撃をMrs. Groseに報告している場面の一部である。この長い二人の対話の中にMrs. Groseの「私」に対する姿勢がよく現れている。子供たちに対する素朴な愛に満ちたMrs. Groseにとってこの若い家庭教師はあまりに不安定であり、心許ない。二人の会話は、家庭教師の思い込みで一方的に進行し、少しも共感が見られない。私が幽霊と対峙した距離が今の距離と同じ位であると言うと、Mrs. Groseは思わず後ろに一歩退く。それを「奇妙な衝動」と「私」は感じるが、咄嗟のこの反応にMrs. Groseの心境がよく現れている。Mrs. Groseにとっての「私」は、「私」にとっての幽霊と同じような不可解な存在なのである。「私」は自分の視点で見ているから、Mrs. Groseの驚きが不思議でならない。彼女に対して一方的に自分本位な信頼を寄せ、その信頼を自分だけが了解しているので、Mrs. Groseの真意を取り違えていることに気がついていない。

「私」はMrs. Groseに向かって言う。「あの恐ろしい日々に」、二人の邪悪なカップルは子供たちを自分たちの悪の企みに染めさせ、その「悪魔の仕事を続行させるために」今も取り付いていると。——“They haven’t been good -- they’ve only been absent. It has been easy to live with them because they’re simply leading a life of their own. They’re not mine -- they’re not ours. They’re his and they’re hers!” ——今の状況が決してよいものとは言えず、子供たちの指導が首尾よく進行していないことを「私」は認めざるを得ないが、かつて二人の恋愛沙汰があった頃は、今よりもずっと悲惨であった。現在の苦境はその時の悪影響が祟っているにちがいない。前述のように、使用人の卑しさからの悪影響は当時危惧されていたので、「私」にとっても、格好の理由づけとなっている。自分の指導力の無さを子供たちの不可解さと結びつけ、また、子供たちを伯父との唯一の接点としての存在として、自分にとって強力な枷となる力を持たせてしまったことで、かえって自分を窮地に追い込んでいる。

“Lord, you do change!” cried my friend. ——Mrs. Groseに自分の変貌ぶりを指摘されても、「私」自身は子供たちと幽霊の同盟関係を看破したと一人合点し、妙に納得している。子供たちへの介入に失敗し、彼らの世界から疎外されてしまった彼女は、それを自分の未熟さゆえのことであるとは認められず、邪悪な世界へと誘いをかける幽霊たちに責任を押し付ける。徐々に追い詰められて、思い込みの世界にはまり込んでいく「私」の変化を目の当たりにしながら

ら、Mrs. Groseは子供たちを素朴に愛し、何とか守ろうと必死である。学問はなくても、長年の経験からの積み重ねで、自らの動揺の世界に同調させようとする「私」の揺さぶりに対して動じることなく、「私」の心情を冷静に探っていく。「私」の話に耳を傾けながらも、慈愛に満ちたその視線は決しておれることなく、二人の子供を絶えず見守っている存在である。「私」が子供たちの内に潜んでいる邪悪をいくら暴き出そうとしても、Mrs. Groseの共感を得ることはできない。焦燥感に駆られ、「私」は殊更刺激的な言動を繰り返し、口角泡を飛ばす勢いで捲くし立てるが、「友」「同僚」と目されるMrs. Groseは、私の心情に対してはほとんど真剣に取り合っていないようだ。Mrs. Groseの目から見れば、新任の家庭教師である「私」はあまりに不安定で、到底大切な子供たちに対する全権を任せられる人間ではない、と判断しているように見える。そういうMrs. Groseと「私」との意識の違いも、「私」を追い詰めることになったのである。

V. 結論

周囲から変人視されていると思っていると彼女は感じながらも、彼女は使命感を口実に自己肯定を必死で行ない、以前の家庭教師と使用人の色恋沙汰を糾弾することで、意識過剰な自分の実態を暴露しているが、それが彼女に幻覚を見せている。彼女の見る幽霊は彼女の心情の映し身である。彼女を取り巻く他者には見えないが、彼女にとって何かが存在していることは感じている。そこには、どうしても共有できない感性の相違が提示されている。彼女が頑強に訴えれば訴えるほどに、周りから孤立していく。これはコミュニケーションの断絶を暗示していると考えられるのではないだろうか。緊迫した関係は巻かれていく「ねじ」の締め具合に似ている。ねじが回転する度に、両者の心に食い込みながら、相互間での新たな展開（'turn'）が生まれていく。見える彼女と見えない他者との構図から見えてくるものは、孤独、憤り、そして、関係の断絶である。その亀裂が広がっていくと、破滅に繋がる。愛し、守ろうとしたMilesを、結局最後に「私」は死に至らしめ、永遠に失ってしまう。非常に限られた個人の視界であるが、実は彼女は、他者の現実もその視界の中に収めている。ただ、見過ごしているだけだ。Mrs. Grose、子供たち、そして、屋敷の人々の反応をその視界の中に捕らえているにもかかわらず、自分の思い込みに固執することで、実際は見えているものを見ないようにしている現実がある。

コミュニケーションの行き違いから、様々な問題が生じ、取り返しのつかない事態にまで発展してしまうことが多発する現代。紙面を賑わす事件のほとんどが相互理解の欠如からおきていると言っているだろう。コミュニケーションの基本はまず「よく聞くこと」にあるといわれるが、この相手の話を聞くというのは実に難しい行為だ。それぞれが自分の主張を述べたいと思ひ、相手の言うことによく耳を傾けてはいない。聞いていたとしても、自分なりの立場で聞き、あくまでも自分の物差しで自分の視界の範囲内で解釈している。

Jamesにとっては、一つの社会のもつ価値とは常に相対的なものであった。彼自身がアメリカとヨーロッパのあいだを往復し、視点を変えるにつれて、その目に映るそれぞれの社会の様相も変わって見えた。彼が見る「ヨーロッパ」はアメリカ人の旅行者の見るヨーロッパであり、「アメリカ」はヨーロッパに渡ったアメリカ人がふりかえって見る祖国の姿であった。このような経験はJamesに、「眺められるもの」(object)「眺めるもの」(subject)との関係によって変動することを教えた。こうしてJamesは対象の絶対的価値を固定したものとは考えず、むしろ「主観」(人間の意識)と「対象」との相対的な関係に重きを置くようになった。…彼にとって、対象は常に自分との「関係」において存在するものであったのだ。このようにsubjectとobjectの関係を重視することから、Jamesは次第に重点をobjectからsubjectの方へ、すなわち対象から人間の視点へ——人間の意識そのものの方へ移すことになった。極端に言えば、ものごとはすべて人間の意識のうちで起こるのである。いいかえれば、世の中のいっさいのできごとは人間の「意識のドラマ」なのである。⁽¹²⁾

幼少の頃より、ヨーロッパ諸国を見聞しながら育てられたジェイムズは、常に観察者としての視点を持ち、傍観者としての人生を歩んでいる。そして、その姿勢を文学という形で昇華させてきた。そのほとんどの登場人物たちが、それぞれの視界の限界で苦悩している。前途有望で聡明なはずの若い女性が、不安という怪物に苛まれながら、特異な環境の下で次第に追い詰められて崩壊を迎えていく様は、私たちに大きく打ち鳴らされる警鐘である。心の奥底にある自分本位の願望と、立派な監督者にならんとする強迫観念が周りのものを巻き込み、もがけばもがくほど周囲から孤立していく。好んで過ちを犯す人はいない。それぞれが自らの正当性を信じて行動している。だが、自分の視界がどうしようもなく狭く、盲点に満ちた限界のあるものだということを意識している者は、一般に実に少ない。少なくともその限界を意識するように努め、実感するようになることで、送る人生は違ってくるのではないだろうか。

人はそれぞれ、自分自身が認識できる一番の存在であるがゆえに、無意識的にせよ、自分の状況だけが一番重要で困難であると感じている。その大変な状況に着目しすぎるのは自身の弱さでもある。自身の弱さに重点を置き続けると、他者の状況は全く目に入らなくなる。自分だけが大変で、周囲の人間は大変な自分を考慮しなければならないと思えてくる。だが、自分が願うほどには周囲のものは頓着しないので、それを無視だと感じると、徐々に怒りを覚えるようになっていく。相手が自分の思い通りに反応をしないと、自分は不当に扱われているような気がしてくる。不当に扱われている気持ちを強く意識し続けると、その態度は周囲を不愉快にさせるものへと変わっていく。そして、相手の不愉快な反応がまた自分の怒りを助長していく。その憤りが成長したものが、自分にとっての「幽霊」なのではないのだろうか。「私」も最初から不穏なものを漠然と感じ取っていた。その不穏なものが力を得て強力になり、その存在を誇示してくると、それは形を持たなければ収まらなくなる。何らかの形を持てば、攻撃し

やすくなるからだ。それが、Quintであり、Jesselの正体ではないのか。彼女にとって、亡き二人が自分自身の不安、羨望、嫉妬、憤りといった行き場のない感情の、目に見える形であったのだろう。周囲の人間には、その不穏な雰囲気を感じることはできても、姿かたちとして認識することはできない。「私」が主張すればするほど、周りとの亀裂は広がるばかりである。幽霊の存在が、見える見えないにかかわらず、「私」と周囲を断絶している。人間関係の中で、人はそれぞれが目前に自分だけの「幽霊」を持つ可能性を秘めているのではないだろうか。その「幽霊」が強力になり、目鼻立ちと形を与えられてしまった時に、数々の悲劇は生まれるのではないだろうか。

時代を経ても、私たちがジェイムズ作品から学べることは、人間は自分の視界の限界から抜け出すことは出来ないのだという現実をまず認識することではないだろうか。自分の視界の中で、当然のように自分に見えているものが、もしかしたら他者には同じようには見えていないのではないか、という視点を持つことがいかに重要であるかということを、作家は私たちに教えてくれているように思われる。

This World is not Conclusion.
A Species stands beyond ---
Invisible, as Music ---
But positive, as Sound ---
It beckons, and it baffles ---
Philosophy --- don't know ---
And through a Riddle, at the last ---
Sagacity, must go --- ⁽¹³⁾

Notes

1. Harold Bloom, ed., *Henry James's Daisy Miller, The Turn of the Screw, and Other Tales* (Chelsea House Publishers, 1987), p.117.
2. Peter G. Beidler, ed., *Case Studies in Contemporary Criticism: HENRY JAMES The Turn of the Screw* (Bedford / St. Martin's, 2004), p.16.
3. 高橋正雄『ヘンリー・ジェームズ研究』(北星堂書店, 1980), p.189.
4. テキストは、*Case Studies in Contemporary Criticism: The Turn of the Screw* (Bedford/St.Martin's, 2004)を使用し、引用は全て同書からである。引用中の傍線は筆者によるもの。
5. Harold Bloom, ed., *Modern Critical Views: HENRY JAMES* (Chelsea House Publishers, 1987), p.125.
6. Kimberly C. Reed & Peter G. Beidler, ed., *Approaches to Teaching Henry James's Daisy Miller and The Turn of the Screw* (The Modern Language Association of America, 2005), p.40.
7. Ibid.
8. Ibid.
9. Dorothea Krook, *The Ordeal of Consciousness in Henry James* (Cambridge at the University

Press, 1967), p.116.

10. V.S.ラマチャンドラン, サンドラ・ブレイクスリー 『脳のなかの幽霊』 (角川書店, 1999), pp.226 ~ 254.
11. Ibid., p.103.
12. 大橋健三郎 他編 『総説アメリカ文学史』 (研究社, 1991), pp.175 ~ 6.
13. Thomas H. Johnson, ed., *EMILY DICKINSON: The Complete Poems* (faber and faber, 1990), p.243.